

諸報告

日本植物分類学会 2005 年度第 1 回評議員会議事録抄録

庶務幹事 黒沢高秀

日時：2005 年 3 月 11 日 17:30 ~ 20:00

会場：高知県立牧野植物園アトリエ実習室

参加者

評議員：() 内は被委任者 評議員出席 7, 委任状出席 3

出席 (7 名)：今市涼子, 小菅桂子, 高橋英樹, 出口博則, 西田佐知子, 村上哲明, 藤井伸二

欠席 (5 名)：秋山弘之, 植田邦彦, 梶田忠 (藤井評議員に委任), 高宮正之 (議長に委任), 綿野泰行 (議長に委任)

幹事会等：() 内は役職

出席 (11 名)：邑田仁 (会長), 黒沢高秀 (庶務), 田中法生 (会計), 三島美佐子 (ニュースレター担当), 鈴木武 (図書), 岡田博 (編集委員長), 菅原敬 (植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当), 西田治文 (自然史学会連合担当), 秋山忍 (和文誌編集), 矢原徹一 (絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会), 伊藤元己 (植物データベース専門委員会)

欠席 (4 名)：加藤英寿 (ホームページ担当), 田村実 (講演会担当), 柏谷博之 (絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会), 角野康郎 (学会賞等検討委員会)

1. 評議員会開催にあたり、邑田会長から挨拶があった。
2. 黒沢庶務幹事により、定足数が確認された。評議員出席 7、委任状出席 3 で本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として高橋英樹氏が選出された。議事録署名人として西田佐知子氏と藤井伸二氏が選出された。

4. 報告事項

- 4.1 会務報告 2004 年度事業報告, 会員数, その他の会務報告。
- 4.2 会計報告 2004 年度の会計報告と特別会計報告。2001 年度より会費未納会員に対する APG の発送停止について。
- 4.3 学会誌に関する報告 『APG』の編集状況。和文誌『分類』の編集状況。
- 4.4 ニュースレターに関する報告 ニュースレターの発行状況。今後の記事の予定。
- 4.5 図書関連報告 学会刊行物の発行状況について。
- 4.6 植物分類学関連学会連絡会報告 2004 年度の活動報告。
- 4.7 日本分類学会連合報告 2003 年度の活動報告。
- 4.8 ホームページ関連報告 ホームページの一部更新について。
- 4.9 日本植物分類学会講演会報告 2004 年度日本植物分類学会講演会の報告。
- 4.10 自然史学会連合関連報告 2004 年度の自然史学会連合の活動報告および 2003 年度の予算・決算に関する報告。
- 4.11 各種委員会に関する報告
 - ・学会賞選考委員会 第 4 回日本植物分類学会賞の選考について。
 - ・学会賞等検討委員会 2005 年 3 月 7 日付けで提出された「学会賞等検討委員会答申」について。
 - ・植物データベース専門委員
 - ・絶滅危惧植物第一委員会
 - ・絶滅危惧植物第二委員会

4.12 その他報告事項

- ・大会、総会、および評議員会の日程に関する要望について。
- ・今年度の野外研修会について。

5. 審議事項

5.1 2004年度事業報告書(案)について

黒沢庶務幹事より2004年度事業報告書(案)が提案され、いくつかの項目について追加、訂正、削除が行われた後、了承された。

5.2 2004年度決算報告(案)について

「5.6 その他 (財)学会事務センター破産に関わる会計処理について」が先議、了承されたのち、田中会計幹事より2004年度決算報告(案)が提案され了承された。

5.3 2005年度事業計画(案)について

「5.6 その他 日韓シンポジウム開催について」「5.6 その他 ポスター賞の新設について」が先議された後、黒沢庶務幹事より2005年度事業計画(案)が提案され、いくつかの項目について追加、訂正、削除が行われた後、了承された。

5.4 2005年度予算(案)、特別会計(案)について

田中会計幹事より2005年度予算(案)のA案(APGの印刷費を多め(昨年度予算と同額)の案)とB案(APGの印刷費を少なめ、ニュースレター16号に掲載した案)、特別会計(案)が提案され、A案を採用することで了承された。

5.5 次期監事候補の推薦

邑田会長より次期監事を評議員会から推薦するよう依頼があった。

5.6 その他

- ・第5回大会開催地について

邑田会長による説明の後、第5回大会を琉球大学で行うことが了承された。

- ・日韓シンポジウム開催について

邑田会長より日韓シンポジウムの状況について説明があった。今後の状況を見て対応することが了承された。

- ・(財)学会事務センター破産に関わる会計処理について

学会事務センター破産とそれに伴う債権放棄、取引先への学会誌の無償提供について、田中会計幹事から説明があり、了承された。

- ・会費滞納について

田中会計幹事より、会費滞納状況について説明があった。幹事会が督促状の送付などの検討をするということが了承された。

- ・情報学研究所とのAPGなどの情報提供の協定について

鈴木図書幹事より現行の電子図書館サービスNACSIS-ELSをNII電子図書館へ移行すること、および新システムの設定の変更点について、学会として利用制限や著作権料を細かく設定できるなどの説明があった。新システムの設定等について幹事会が原案を作り、改めて提案することとなった。

- ・学術著作権協会からのILL図書館間貸借に関する依頼について

学術著作権協会から従来郵送していたILL複製物をインターネットによって送信したいのでそれを認めてほしい旨の申し入れがあったことが、黒沢庶務幹事から説明された。これを受諾することが了承された。

- ・学会誌掲載内容の転載許可の手続きについて

黒沢庶務幹事より、学会誌掲載内容の商業目的でない転載許可について、一般には公開されない出版物や電子媒体への転載の場合は、許可申請をしなくてもよいものとするとの提案があり、了承された。

- ・学会誌掲載内容の転載許可担当評議員の選出について
標記担当評議員について今市評議員が選出された。
- ・大会発表賞の新設について
大会発表賞新設の趣旨について会長から説明があった。今回ポスター賞を新設することに対し、複数の評議員から意見が出され、本大会でのポスター賞の新設は見送ることとなった。大会発表賞については幹事会が原案を作り、改めて提案することとなった。
- ・総会議事について
総会の議事次第について黒沢庶務幹事より原案が出され、いくつかの訂正の後に了承された。

日本植物分類学会第4回大会総会議事録抄録

庶務幹事 黒沢高秀

会場：高知県立牧野植物園映像ホール

日時：2005年3月12日13:30-14:30

1. 総会に先立ち大会会長代理・田上裕三牧野植物園副園長より挨拶があった。
2. 総会に先立ち邑田会長から挨拶があった。
3. 高橋正道氏が議長に選出された。
4. 報告事項
 - 4-1 会務報告
前年度の事業報告と決算報告が、黒沢庶務幹事と田中会計幹事よりそれぞれ行われた。岡田編集長より英文誌『APG』の編集状況の説明があり、ISI登録に向けた取り組みについて報告があった。
 - 4-2 各委員会からの報告
 - ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
矢原委員長より委員会の前年度の活動報告がなされた。
 - ・植物データベース専門委員会
伊藤委員長より委員会の前年度の活動報告がなされた。
 - ・学会賞等検討委員会
角野委員長より委員会答申について説明があった。
 - ・学会賞選考委員会
角野前委員長より、第4回日本植物分類学会賞は高宮正之氏と南谷忠志氏に決定したことが報告された。
 - 4-3 逝去された学会員に対して黙祷
最近逝去された学会員に対して黙祷が行われた。
5. 審議事項
 - 第一号議案 2005年度事業計画案承認の件
黒沢庶務幹事から2005年度事業計画案について説明があった。植物分類学マニュアルの編集について質問があり、加藤雅啓氏が状況を説明した。審議の結果、異議なく承認された。
 - 第二号議案 2004年度決算報告書並びに2005年度予算案承認の件
田中会計幹事から上記2件について説明があった。栗林監事により会計監査報告書が読み上げられた。赤字予算であることについて質問があり、田中会計幹事と横山前会計幹事より英文誌『APG』を年3回発行にした影響であること、当面は繰越金でまかなえるが、会費値上げを避けるためには学術出版助成等を利用する必要があることが説明された。また邑田会長

より ISI 登録も含めた学術出版助成採択のための努力を行って行くこと、会費滞納を減らす必要があることの 2 点の補足があった。審議の結果、異議無く承認された。

第三号議案 次期監事選出

高橋英樹評議員（第 1 回評議員会議長）より、次期監事候補者として芹沢俊介氏と吉田國二氏が推薦された。審議の結果、二氏が次期監事として選出された。

6. その他

6-1 学会事務センター破産に関わる会計処理について

学会事務センター破産とそれに伴う債権放棄、取引先への学会誌の無償提供について、田中会計幹事から説明があった。高橋議長より田中会計幹事にこの件が 2004 年度決算報告書に含まれていることの確認があった後、審議の結果、異議なく承認された。

6-2 会費滞納について

田中会計幹事より、会費滞納状況について説明があった。次いで、滞納者を減らすための方法等について意見交換を行った結果、1) 長期間の滞納者には会誌等の発送停止を行うこと、2) 会長名で督促を行うこと、その結果を見て 3) 次回評議員会で滞納者の除名を検討することが承認された。

6-3 学会誌掲載内容の転載許可の手続きについて

黒沢庶務幹事より、学会誌掲載内容の商業目的でない転載許可について、一般には公開されない出版物や電子媒体への転載の場合は、許可申請をしなくてもよいものとするとの提案があった。講義資料をホームページに載せる場合について質問および、情報学研究所の新論文提供システムが始まった場合の措置について質問があった。判断に迷うような場合は許可申請をすることを原則とすること、新論文提供システム開始等の状況に合わせて手続きも見直して行くことが説明された。審議の結果、異議なく承認された。

6-4 2006 年度大会について

邑田会長より、次回大会を琉球大学に於いて開催することが提案され、承認された。琉球大学の横田昌嗣氏より挨拶があった。

絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員について

庶務幹事 黒沢高秀

今期の絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員が決まりましたので報告いたします。

矢原徹一（委員長）	勝山輝男（副委員長）			
小川 誠	加藤辰己	角野康郎	川窪伸光	芹沢俊介
高橋英樹	高宮正之	藤井伸二	横田昌嗣	米倉浩司

日本植物分類学会 2006 年度大会について

庶務幹事 黒沢高秀

2006 年度大会は沖縄で開催されることになりました。琉球大学理学部の横田昌嗣さんを中心に準備にあたり、日程は 2006 年 3 月 18 日（土）～ 19 日（日）を含む 2 または 3 日間とする方向で調整中です。

2004 年度事業報告と 2005 年度事業計画について

庶務幹事 黒沢高秀

ニュースレター No. 16 に掲載した 2004 年度事業報告(案)と 2005 年度事業計画(案)について、評議員会で若干の訂正が行われた後、評議員会と総会で承認されました。事業報告(案)からの改正点をご報告いたします。また、承認された事業計画を改めて掲載いたします。

2004 年度事業報告(案からの改定)

(1) 集会等の開催

第 4 項目を「国立歴史民俗博物館で開催されたアジアの植物多様性と分類に関する国際シンポジウム (IAPT シンポジウム 2004) を共催した」と訂正する。

(3) 委員会活動

第 5 項目として「学会賞選考委員会」を追加する。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

第 2 項目「IAPT シンポジウム 2004 実行委員会の活動」を削除する。

2005 年度事業計画

(1) 集会等の開催

- ・ 2005 年度講演会を開催する。
- ・ 年次学術集会 (日本植物分類学会第 4 回大会) を開催する。
- ・ 2005 年度野外研修会を開催する。

(2) 出版物の刊行

・ 学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 56 巻 1-3 号 (計 3 冊) を発行する。

和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 5 巻 1-2 号 (計 2 冊) を発行する。

- ・ ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』16-19 号 (計 4 冊) を発行する。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する (ニュースレター No. 16 で報告)。

- ・ 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・ 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・ 植物データベース専門委員会
- ・ 学会賞等検討委員会 (答申作成後解散予定)
- ・ 学会賞選考委員会

(4) 日本植物分類学会賞

- ・ 第 4 回日本植物分類学会賞の授与をおこなう。
- ・ 第 5 回日本植物分類学会賞の選考をおこなう。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・ 学会連合等への参加・連携をおこなう: 日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合、日本分類学会連合など。

(6) その他

- ・ バックナンバー等の販売を行う。
- ・ 植物分類学関連情報 (学術集会、研究動向、出版物、公募) を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供する。
- ・ 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換をする。
- ・ 植物分類学マニュアルの編集を継続する。

自然史学会連合活動報告

自然史学会連合担当 西田治文

2004年度は十分な活動報告ができませんでしたので、全体をまとめさせていただきます

A. 2004年度活動

1. 運営委員会等：5回の委員会と、1回の総会（2004年12月4日（土）10:00-11:30 国立科学博物館新宿分館資料館1階会議室）を開催した。
2. 加盟学会会員数の調査結果：2004年度から日本陸水学会、植生学会、日本進化学会が加盟。37学協会の延べ会員数は約45000。
3. 博物館職員の情報ネットワーク構築：博物館部会の情報を提供するために加盟学協会の会員を結ぶネットワークづくりを試みたが、個人情報の提供に慎重な加盟学協会が多く、説明不足による理解の不足もあり実現に至らなかった。
4. 博物館部会：自然史系博物館のネットワークづくりと博物館の研究環境の向上を目的として、主にメールを用いて議論を行った。博物館の望ましい基準の見直しが行われ、今後地方博物館の指定管理者制度導入や独立行政法人化など、民営に近い方向が予想される。今後、各地の博物館の実態調査に基づき提言を行う必要がある。次年度は今年度実施できなかった部会メンバーを集めた会合を開く予定。
5. 自然史教育展開プラン：従来の方法の見直しを検討中。過去には中高理科教員に対し講師として研究者を派遣するプログラムを実施してきたが、このやり方では限界がある。今後は地域博物館などを利用しながら自然史教育を行う方向に転換を図る。理科教育については、学術会議の理科教育特別委員会に理科離れ対策に自然史教育が有効であるという意見書を提出した。
6. ホームページ：各加盟学会からの情報提供が十分ではない。特にギャラリー、エッセイのコンテンツ不足が問題。
7. シンポジウム「日本の自然史 - 多様な生き物たちのエピソード -」（2004年12月4日（土）13:00-17:30 国立科学博物館新宿

分館）

8. 日本学術会議会員の情報提供者の選出：会員の選出はボトムアップではなくトップダウン方式に変更される。今回の情報提供は連携会員の選出にも深く関連するため、その点を十分に考えた情報提供が必要との意見を受けたあと、9学会から提供された26名の候補から連合提供分2名を選挙により決定した。上位4名の結果は、1位：西田治文（10票）、2位：伊藤元己（9票）、松浦啓一（9票）、4位屋富祖昌子（4票）となり、この中で学術会議からの依頼数と選出基準に即した人選を行い、連合から西田、伊藤両氏の情報を提供した。その後、学術会議から1名を地方から選出せよとの指摘があり、伊藤氏に換えて屋富祖氏の情報を新たに提供した。

B. 2005年度活動計画

委員会は従来通り隔月程度開催（すでに2005年1, 3月に開催）。従来の活動内容を改善しながら展開。特に、総会をシンポジウム当日から分離して充実させること、シンポジウムは首都圏では開催せず、代わりに博物館部会の活動も兼ねて地域博物館で実施することとした。11月20日に大阪市立自然史博物館での共催を計画中。

C. 活動経過報告

- ・理科離れ意見書は学術会議第4部で紹介され、次は文科省へ。
- ・代表指名の運営委員として新たに上田恵介氏（立教大学・鳥類学会）に加入を依頼した。
- ・環境省「外来生物法」パブリックコメントに対応し、オオクチバス、セイヨウオオマルハナバチの2種についてそれぞれ意見を鎮西代表名で3月1日提出。原案は魚類学会、昆虫学会が作成。
- ・連合シンポジウム
日時：11月20日、午後。大阪市博、西日本自然史博物館ネットワークに共催依頼。

庶務報告 (2005年1～3月)

庶務幹事 黒沢高秀

学会として作成した主要な公的文書や交わした契約、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものを逐次ご報告していきたいと思えます。

-
- ・新旧幹事引き継ぎ会議を行った(1月11日, 東京大学大学院理学系研究科附属植物園)。
 - ・研成社に『プランタ』の裏表紙の連絡先および若干のレイアウトの変更を連絡した(1月28日)。
 - ・日本郵政公社東北支社長あてに『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『日本植物分類学会誌』の学術刊行物郵便物団体の所在地変更届を提出した(3月7日)。
 - ・2005年度第1回評議員会の承認にもとづき、有限責任法人学術著作権協会と「ILL

送信に係わる権利委託契約書」を会長名で交わした(4月1日)。これは、本学会が著作物複写権利を委託し、許諾業務を行っている学術著作権協会がこれまで行ってきたILL(Inter Library Loan: 図書館間貸借)複製物の郵送を、今後インターネットを用いた送信でも行うことを学会として許可するというものです。なおILLとは、大学図書館等で自館が保有していない著作物の複製を研究者から要請された際に、その著作物を有する他館に著作権許諾なしに複写を依頼し、利用者に無償で提供する仕組みです。

・「日本植物分類学会第5回大会開催について(依頼)」を琉球大学理学部横田昌嗣氏に送付し、会長名で大会開催依頼を行った(4月4日)。

日本植物分類学会第4回大会報告

大会準備委員長 小山鐵夫

第4回大会を2005年3月11日より13日まで、6年前にリニューアルオープンした高知県立牧野植物園の牧野富太郎記念館本館において開催しました。高知県産の杉材をふんだんに使い、五台山の風致に合った特徴ある建物です。準備委員会では当初、従来の大会会場とは異なり、交通の便が極端に悪い事、会場の収容人数が大学に比べて少ない事など様々な不安がありました。会場へのアクセスが悪いため、参加人数を例年より少なく見積もらねばならず、さらに懇親会場に大学のように学生食堂などが使用できないため、前大会よりも参加費を全体的に上げざるを得ませんでした。しかし、申込の状況は非常によく、当日参加者も合わせると、参加者は当初の予想を大きく上回るものでした。一般参加者133名、学生参加者64名の計197名の参加者がありました。会費が高かったにもかかわらず

多くの学生にも参加してもらうことができたのは幸いでした。

公開シンポジウムは、牧野植物園が進めてきたフロラ研究に関する国際協力研究をテーマに定め、「インベントリー」をキーワードとしてその第一線で活躍する先生方に御講演を賜りました。現在私共が直面している分野でもあり、かつ厄介な部分のある課題で、かなりのインパクトがあったと思っております。研究発表は、口頭による29題とポスターによる42題の申し込みを頂きました。ポスターセッションのボードはレンタルで不足分を補いましたが、閲覧スペースが狭く、ご不便をおかけしました。3日目には第4回分類学会賞を受賞された高宮正之、南谷忠志両氏の受賞講演が行われました。予測より多くの会員の方々にご参加いただいたことと、開催に際して(財)高知県観光コンベンション協会より補助金を頂いたおかげもあり大会運営は黒

字となりました。

懇親会はホテル日航旭ロイヤルで行いましたが、これも例年よりかなり割高であったので当初は参加者が少なくなるのではないかと心配しましたが、一般90名、学生48名の計138名の参加があり大変盛況でした。懇親会では高知市より「よさこい踊り」を提供して頂きました。料理やアルコール類もなるべく地元のものを用意することを心がけました。ただ、

懇親会場へのアクセスのためホテルまで学会終了時刻に合わせて臨時バスの運行を土佐電鉄に依頼し了解を得ていましたが、行き違いがありバスが遅れました事で皆様にはご迷惑をおかけしましたことをお詫び致します。

最後に大会準備に際してご協力頂いた全ての皆様、また座長依頼を快くお引き受け下さいました各位に心よりお礼申し上げます。

日本植物分類学会第4回大会に参加して

栗本 篤臣（京都大学修士課程1年）

私は研究を続けていく上で、「自分が面白いと思うことは、他人が聞いても面白いのか」という意識は、一番重要なことだと思っています。しかしともすれば自分の研究・興味のみでのめりこんでしまう私にとって、この判断は容易ではありません。

今回の大会は、自分に馴染みのない研究、ニッチの重なる研究、新鮮な考え方、ユニークな人達に出会う機会を与えてくれました。そうした交流を通じたことで、もやもやとした知識に方向性が与えられたような気がしています。

もし学会発表のような場がなければ、私の興味は糸の切れた風船のように、あらゆる方向へと飛んでいってしまうことでしょう。様々な専門分野の方が一年の間に思う様自分の興味を伸ばし、学会という場でそれらを束ねて、また新たなスタートラインから伸ばしていく。研究とは、そんな拡散と収束を繰り返していくもの

なのかな、というイメージを持ちました。

また私は今回初めて、研究を外に発表する機会を頂きました。発表を甘く見ていたつもりは無かったのですが、そこで「上手なプレゼンテーション」の難しさをしみじみと感じました。研究成果は一般に受け入れられてこそ意味を持つものであり、だからこそ研究に携わる人間は、その為の表現力を養わなければならないということ。その必要性を、改めて強く思いました。

何か一つでも良いから吸収してこよう、と思って参加した大会でしたが、知識以外にも得るもののある大会でした。研究という仕事に対して、今後どのように接していくべきか。そのヒントが得られた、実りある経験になったと思います（でも一番吸収したのは、きっとアルコール…?）。

最後にこの場を借りて、刺激を与えてくださった大会参加者の皆さんと、大会の運営と共に、あんな素晴らしい（本当に素晴らしい!）懇親会を整えてくださった運営委員の方々に、深く御礼申し上げます。

編集後記

今年は春が遅めかな？と思っていたらいきなり真夏日。今年も異常気象気味なのでしょう。去年は軒並みの台風で、調査木が根こそぎ倒れて枯れていたり調査地に行けなくなってしまったりと散々でした。今年は穏便に欲しいと願っているのですが・・・最近地震も怖い・・・さて、ハーバリウム紹介はリレーになりつつあります。他にもネタや情報、感想などもお待ちしております。

三島美佐子 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学総合研究博物館
電話：092-642-4298 FAX：092-642-4299 メールアドレス：mishima@museum.kyushu-u.ac.jp

お知らせ

平成 17 (2005) 年度野外研修会のお知らせ

水野瑞夫 (岐阜市、自然学総合研究所) 邑田 仁 (東大植物園)

岐阜県徳山ダム周辺と伊吹山の植物

期日と日程 : 2005 年 8 月 23 日 (火) - 25 日 (木)

第 1 日 (23 日) 岐阜県揖斐川町 揖斐川丘苑 (電話 0585-22-1181) に夕刻集合 (各自) (室内研修会および夕食会)

室内研修 (予定) : ミャンマー植物調査の現状 (邑田 仁)

第 2 日 (24 日) 揖斐川丘苑 9 時出発

徳山ダム見学と冠山植物観察

揖斐川丘苑泊 (懇親会)

第 3 日 (25 日) 揖斐川丘苑 8 時出発

旧春日村のさざれ石公園見学。笹又より伊吹山登山、途中で植物観察。15 キロ地点からバスに乗り山頂駐車場まで行き、駐車場から伊吹山山頂へのぼり山頂周辺の植物を観察後、バスにて JR 関が原駅に到着、解散 (午後 5 時の予定)

.....

○第 2 日め、日本一の人造湖となる徳山ダムはほぼ完成し、今年末から貯水をはじめの予定となっていますが、湖底に沈む場所を観察することにより自然への影響を実感していただけたと思います。冠山は加賀の白山から大日岳、能郷白山、伊吹山に連絡する中間の山です。尾根筋はブナ帯で、見事なツクシシャクナゲの群落があります。カライトソウなどはこの付近が分布の西限です。伊吹山に多いミヤマコアザミなどもこの付近で見られます。

○第 3 日め、伊吹山はほとんどが石灰岩の山で標高 1337m、昔から薬用植物で有名であり、維管束植物約 1300 種類のうち 280 種類は薬草です。今でもサワアザミ、アマチャ、トウキ、センキュウ (中国渡来品)、ヒメフウロ、ゲンノショウコ類などが村

人に用いられています。旧春日村の古屋、笹又は江戸時代に飯沼慾齋が伊吹登山をした道です。天然記念物のさざれ石があり、この巨岩だけでもクモノスダ、ツルデンダ、コシオガマ、ヒメフウロ、ミヤマトウキなど 79 種類を観察できます。笹又から伊吹を見ながら急な登山道を登ります。土用の頃には村人が畑で薬草を刈り取っている様子に遭遇します。春先には畑のふちでセツブンソウ、キバナノアマナ、アミガサユリが見られる所です。途中マネキグサ、シオガマギク、イブキトリカブト、ギンバイソウ、コゴメグサなどを見ることができます。山頂の草地群落は天然記念物に指定されており、伊吹山独特の生態を示しています。この場所では植物採集ができませんのであらかじめご了承ください。

.....

参加費用 : 33,000 円 (2 泊各 3 食、懇親会、貸し切りバス代を含む)

* 第 1 日の夕食会不参加の場合 28,000 円。参加人数などにより多少の変更があります。

申し込み : 〒 112-0001 東京都文京区白山 3-7-1 東京大学附属植物園

邑田 仁 宛 (tel 03-3814-2625 / fax 03-3814-0139)

郵便または FAX で①氏名、②連絡先住所、③電話、FAX、メールアドレス、④バ

ス利用か自家用車か明記のうえ、6月20日までにお申し込みください。また、第1日めの夕食を食べない方、1日だけ参加希望の方はご希望をお書きください。申し込み順に30名で締め切らせていただきます。お申し込みをいただいた方には6月末までにご連絡いたします。

平成17年度菌学教育研究会講座

「菌類の多様性と分類」開催のご案内

布村公一

平成17年度前期講座5日間コースを、本研究会筑波センターで下記のとおり開催します。本年度は、新たに筑波山の微小菌類の観察会を企画しました。奮ってご参加下さい。

講座日程

平成17年

- 6月25日(土) 顕微鏡の使い方
菌学教育研究会 浅井郁夫、布村公一
- 6月26日(日) 午前：北海道大雪山系のキノコ 上川キノコの会 佐藤清吉
午後：山梨県のキノコ 山梨県森林総合研究所 柴田 尚
- 6月27日(月) 筑波山の微小菌類観察会
午前：野外観察会
午後：孢子類の観察と同定実習 森林総合研究所 根田 仁
サントリー微生物科学センター 天野典英
菌学教育研究会 土居祥兌他
- 6月28日(火) 午前：接合菌類の分子系統 環境研究所 田辺雄彦
午後：ベニタケ科の分子系統 大阪府立香里丘高等学校 下野義人
総会の開催 6月26日(日)の昼食時に講座会場で総会を開催する予定です。
希望者にはお茶と仕出弁当(500円程度)などを準備します。
- 6月29日(水) 希望者にセンターの実習会場と顕微鏡などを開放します。

開催場所 菌学教育研究会 筑波センター

茨城県つくば市筑波字外輪町2074番地3～4

交通手段については、地図・主要交通機関と時刻表を参照して下さい。なお、宿泊施設は、センターの施設を利用される方は寝袋などを持参下さい。1泊1,000円です。つくば市営のふれあいの里は1泊2食付で4,200円です。ただし、火曜日は定休日です。詳しくは、申し込まれた方に別途お知らせします。

講座開催時間(目安)：午前10:00～12:30 および 午後13:30～17:00

募集人員：1講座 6月25日は10名、6月27日は約25名、6月26、28日は約50名

参加費：1日につき 正会員一般 3,000円 正会員学生 2,000円(非会員の方は1,000円増)

申し込み：私製はがきに50円切手を貼って6月10日(必着)までに下記布村公一宛

申し込んでください。はがきをお送りしていない方は以下に連絡下さい。

問合せ・連絡先

① 〒187-0032 東京都小平市小川町2丁目1299-49

菌学教育研究会事務局 布村公一

TEL & FAX 042-343-6836, E-mail: BZG22155@nifty.com

② 〒305-0003 茨城県つくば市桜1丁目5-5 TEL&FAX 029-857-9601

土居祥兌(センターの電話は029-867-2254ですが、不在のことが多いです。)

日本学士院研究奨励賞受賞について

岩槻邦男

本学会会員の長谷部光泰氏（基礎生物学研究所教授）が第1回の日本学術振興会賞を受賞し、さらにそのうちから厳選された日本学士院学術奨励賞を受賞した。

日本学術振興会賞

日本学術振興会賞は45歳以下の若手・中堅研究者を対象に、日本でもっとも優れた研究実績を持つ人を20人前後顕彰するために、2004年度にスタートした顕彰制度である。学術の全分野（自然科学はもとより、社会科学、人文学も含む）の学術研究に携わる研究者を対象とするものだから、候補に該当する人の総数は膨大な数に達するはずである。そのうちから選ばれるのは、20人と相当の数になるといっても、大変な競争にうちかつことである。長谷部教授がこの賞を制度の初年度に受賞されたことに深甚の敬意を表したい。長谷部教授のこれまでの全業績が対象となっているが、分類学会のニュースに、その業績を改めて紹介する必要はないと判断し、詳述することは割愛する。

なお、第1回の受賞者は20名を少し上回り、人文・社会科学系6名、理工系11名、生物系8名、計25名だった。

日本学士院学術奨励賞

日本学術振興会賞では、20人前後の受賞者のうち、特に顕著な功績を上げた5人以内を選んで日本学士院学術奨励賞を授与することとしている。これもこの新制度の目玉である。その第1回の受賞者の1人に長谷部教授が選ばれた。重ねて賞賛の言葉を贈りたい。

受賞の背景と意義

わたしはこれまでに国際賞、国内賞など、賞の選考にいくつも関与してきた。この新しい制度の賞の選考には関与していないが、他の賞の選考の状況などを頭に置きながら、これまでに賞の選考に携わった経験を踏まえて、長谷部教授の今回の受賞の意味を考えてみたい。

日本学術振興会賞は20人程度をめぐりとして毎年選考されるということである。賞というものの意味から考えれば、20人といえば結構な数である。しかし、実際に自分たちの分野を頭に置きながら、その数を考えるとどうということになるか。簡単に考えても、文系と理系（という区別も現在では曖昧ではあるが）を半数ずつとすると、理系には10人ということになる。理学と包括される分野を伝統的な考えに従って、工学、医学、農学、理学と大別し、また理学を数理学、物理学、化学、生物科学と細分すると、研究者人口から見ても、生物科学はごく小さい割合を占めるだけだろう。（ちなみに、日本学術会議の現会員は210人であるが、そのうち理学系の生物科学者は6人である。全会員の35分の1である。植物学分野はさらにそのうちの1人である。理系の100分の1より小さい割合である。）このように考えると、日本学術振興会賞が対象とする学術の分野のうちで、広義にとっとしても、植物の多様性に関係する分野はきわめて小さい割合を占めるに過ぎないという計算になる。

日本学術振興会賞は分野を前提に選考されるものではなく、優れた中堅・若手研究者を顕彰し、それを日本の学術全体の振興の契機にしようとする意欲的な賞であると理解している。だから、分野を

代表するのではなくて、長谷部教授が日本の学術を振興する上で顕著な功績があると認められたのだから、同学の仲間の1人としてたいへんうれしいことである。わたし自身、その業績が今回の顕彰に値するものであることは自信をもって推挙できることであると信じている。

日本学士院学術奨励賞は、初年度の今回最大の5人が選ばれている。顕彰された5人の分野を見てみると、人文学1名、社会科学1名で、あとの3人がいわゆる理系の研究者である。そのうち1名は数学で、1名は免疫学（医学）を専攻している人であると聞いている。そして、（物理学や化学の分野の人を差し置いて、）長谷部教授が選ばれたのである。そういう評価を得ていることを見据えて、長谷部教授の成功を大きく讃えたい。

さらに、この栄誉を紹介するにあたって、この顕彰は長谷部教授の栄誉にとどまらないことにも触れておきたい。わたしのこれまでの経験でいえば、かつての日本では、このような事業が始められる際に、第1回目に、物理学や化学を差し置いて系統分類学とか多様性生物学の分野が顕彰の対象になることなど考えられもしなかったことである。（私たちの世代

の研究の実績がその程度だったと評価されても、特に反論はしないけれども。）それだけに、長谷部教授の成果の大きさを改めて直視すると同時に、さまざまな面における研究分野の偏りが、今では完全に取り払われている現実を改めて見直すのである。長谷部教授の顕彰を紹介するのに合わせて、私たちの同学の、特に若手・中堅の研究者の皆さんに、私たちの分野の研究が日本でどのように評価されているかを改めて見直したいと呼びかけたい。

本稿は、せっかくの長谷部教授の受賞が研究仲間にもあまり周知されていないことを知り、邑田会長に学会として紹介した方がよいのではないかと示唆したところ、それならお前が書けということだったので、以上のように紹介させていただいた。純粋に客観的な紹介ではないし、栄誉の紹介以上のことに触れているかもしれないが、受賞者の栄誉を称えるだけでなく、我々の分野の発展にもよい影響を与えることを期待して、こういう紹介にさせていただいた。意図するところが理解していただけたらと祈念する。

分類学会のホームページ、
もうご覧になりましたか？

日本植物分類学会では、ホームページを設けています。Flora of Japanの内容公開をはじめ、耳よりな情報やリンクを充実させています。是非一度ご覧下さい。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/>

シリーズ・ハーバリウム紹介

徳島県立博物館植物標本庫（TKPM）のご案内

小川 誠・茨木 靖（徳島県立博物館）

徳島県立博物館

徳島県立博物館は動物、植物、地学、考古、民俗、歴史、美術工芸の分野を扱っている総合博物館で、前身の徳島県博物館が1990年に文化の森に移転したものです。植物分野は小川と茨木の2名の学芸員と標本整理補助スタッフ2名の構成となっています。

植物標本庫

標本庫はTKPMのコードを付けて Index Herbariorum へ登録されています。維管束植物の標本が主で、約12万件の標本が整理され、データベースに登録されています。絶滅危惧種を除いた県内産標本はインターネットで公開されています (http://www.muse.comet.go.jp/DB_herb/search.htm)。他にはコケ、地衣、藻類などの標本が若干あります。



徳島県立博物館外観

収集とコレクション

標本の収集については、館員による採集、一般からの寄贈に加え、東北大学や福島大学、オレゴン州立大学など国内や国外の機関と交換標本を行っています。

主なコレクションは阿部・赤澤コレクションです。阿部コレクションは阿部近一氏が書かれた徳島県植物誌のベースとなった標本で、赤澤コレクションは赤澤時之氏の徳島県や高知県、戦前の中国東北部などの標本です。両コレクションで南四国をほぼカバーしており、現在整理中ですが閲覧は可能です。

標本庫および標本データの活用

最近の経済的状況により、どこの標本庫でもその運営の予算は減る一方かと思えます。分類学的研究に必要なだとは言うものなかなか理解されませんので、さらにその意義を訴え、理解を深める必要があります。そのため当標本庫においては下記のような活動を行っています。

1. 勉強会の開催

県内の植物研究者などが集まって「みどりくらぶ」を月1度開催し、標本を分類群順に検討しています。県産新記録の発見や分類学的な課題を抽出することができています。

2. レッドデータブックの作成

徳島県版レッドデータブックの作成にあたり、標本のデータを活用しました。

3. 自然環境（植物相）調査のサポート

公共工事等で植物相の調査が行われていますが、その結果については疑わしいという例は少なくありません。当館では調査担当者と打ち合わせをし、調査方法や調査結果に検討を加え調査精度を上げるようにしています。昨年は県内最大級のアゼオトギリ群落の発見につながりました (<http://www.museum.comet.go.jp/mnews/No57.pdf>)。調査の際に作成された標本は標本庫におさめるようにしています。

ご利用にあたって

実体顕微鏡や基本的な図鑑はご利用できます。スタッフの勤務の都合上閲覧できない場合もありますので、小川または茨木に前もってご連絡の上お越しく下さい。

〒770-8070 徳島県徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園内
 徳島県立博物館 <http://www.museum.comet.go.jp/>
 小川 誠 (ogawa@staff.comet.go.jp), 茨木 靖 (ibaragi@staff.comet.go.jp)

徳島県立博物館ハーバリウム訪問記

御巫由紀 (千葉県立中央博物館)

徳島県立博物館は、徳島県文化の森総合公園という複合施設の中心にあります。徳島駅から市営バスで15分ほど、市原というバス停で文化の森行きのシャトルバスに乗り換えて数分。園瀬川の橋を渡るとすぐ到着です。

今回は、阿部近一先生が研究された徳島県の標本を拝見したいと思い、お訪ねしました。小川誠さんにすっかりお世話になりました。ここ数年ツクシイバラ *Rosa multiflora* var. *adenochaeta* について調べているうちに、徳島県植物誌で記録を見つけ、九州と中国地方だけじゃなかったのか、と、地名を頼りに探しに行くつもりでしたが、ご本人の標本を見せていただけるなんて、こんなありがたいことはありません。

ハーバリウムは燻蒸が3年に1度なので、ナフタリンで防虫処理をしています。やはりニオイが少しつらい、ということで、標本を大きなプラスチックケースに入れて実験室まで運び、広い机でじっくり標本を拝見させていただきました。標本はいずれもバーコードシールが貼られていて登録も完璧、きわめて能率よく2日間(8時間ほど)で *Rosa* 属の標本約400点をひとつおりにチェックできま

した。ツクシイバラがたしかに吉野川流域にあるらしい(やっぱり花の時期に行かなくちゃ)とわかっただけでなく、阿部先生が徳島県植物誌に書いていらしたトックリイバラ、シラゲノイバラ、ミタケノイバラ、アワノミヤコイバラというのがどんなバラかも見る事ができました。

興味深かったのは、すべての標本が1枚1枚台紙と同じ大きさの薄紙(上辺をびったり貼ってある)で覆われていること。たいへんな手間ですが経験上、もし万が一、虫害が発生したとしても、この薄紙で被害を最小限に押さえられるのだそうです。

地域の標本を利用しやすい形で安全に保管することは、地域博物館の大切な仕事です。財政面でも人員面でも厳しい現実には囲まれています。私のいる千葉県立中央博物館でもなるべく高いレベルを維持するように見習っていきたいと思います。小川さんが「テスト運用中」として徳島県立博物館HPで公開している標本データも、写真と地図入りでとても充実しています。ぜひ一度ご覧ください。

書籍紹介

「猪名川町の植物誌」

牛島清治・牛島富子著 自費出版

2005年1月発行 A4版 250頁 (内写真37頁) 頒価5000円

猪名川町は兵庫県の南東部に位置し、大阪府と県境を接する町である。ほとんど低山地(最高750m)ではあるが、かつて多田銀山があったり、猪名川溪谷が自然公園に指定されていて、植物相の豊かさがうかがわれる。しかし、交通の便があまりよくないことや特に高い山などもないことから採集に訪れる人も少なく、植物相についてほとんど情報がなかった。近年はベッドタウンやゴルフ場の開発が相次いでいる。

このほど猪名川町在住の牛島清治、富子夫妻が「猪名川町の植物誌」を出版された。7年間にわたり町内を丹念に歩き、丁寧に標本を作り、調べてこられた成果です。

前半は猪名川町の植物相の紹介と隣接する市町の植物相との比較、町内の植物文化の伝承の聞き取りで、後半は膨大な標本に基づく植物目録よりなる。各種に示された証拠標本はすべて兵庫県立「人と自然の博物館」と頌栄短期大学に納められている。頌栄に納められた標本は黒崎が目を通し、さらに、シダ植物は白岩卓巳先生、サトイモ科は小林禧樹氏に再同定していただいた。オシダ、イブキシダ、キジョラン、ナベナ、タウコギ、カンザシギボウシ、ホソバカンスゲ、ニッ

コウハリスゲなど重要な新情報が多く含まれている。これらの情報をもとに、現地を訪ねた研究者もあったと聞いている。

私は兵庫県や近畿レッドデータブックの編集に携わって、各植物の現状についてのデータが不足していること、また各地の現状を把握するために地域集団のモニタリングの不可欠をも感じている。その点で、証拠標本に裏付けされた、地道な努力によるこのような本は単なる趣味や地域的興味の産物ではなく、植物学的にも重要な資料と言える。県単位の植物相調査は多数の協力者と組織力が要求されるが、少人数による限られた地域の植物相調査は比較的容易である。公開された証拠標本に基づき、各地の植物相が明らかにされることが望まれる。

なお、「猪名川町の植物誌」の頒価は5000円ですが、分類学会会員には4000円にさせていただきます。申し込みは、送料込みで4340円を郵便振替(口座番号:00960-0-99294、加入者名:牛島清治)で、通信欄に猪名川町の植物誌、分類学会会員と記入してください。ホームページ(<http://www.eonet.ne.jp/~ktu-inagawa>)でも案内を見ることが出来る。

黒崎史平 (頌栄短大)

「近畿地方植物誌」

村田源 著・レッドデータブック近畿研究会 編

特定非営利活動法人 大阪自然史センター 発行 2004年12月20日 257頁

定価3400円(税込)*会員割引があります

今から12年前、フロラの調査で京大の標本室にこもっていた頃のことです。木枯らしの吹き込みそうな旧標本室で、着

膨れしたダルマのような姿で標本を調べている私に、やさしく声をかけてくださったのが村田源先生でした。京大の標本でおどろく

ほど頻繁に目にする同定者のお名前と姿が、冬の陽射しが重なるように暖かく結びついたのを覚えています。やがて私の調査も終わり、標本室も立派な新しい施設に生まれ変わりましたが、村田先生の存在は以前と変わらず京大の標本を包み込んでいます。そんな村田先生の何と50年にわたる標本調査の集大成が、このたび一冊の本としてまとまりました。「近畿地方植物誌」です。

村田先生は、京都大学の標本室に収められている近畿地方の植物標本の産地を、標本を一枚一枚手に取りつつ調査し、リストにして発表されています。「兵庫生物」に30回にわたって、また「近畿植物同好会会誌」に15回にわたって連載されたこのリストには、各植物の産地と図の載る文献名のほか、種によってはその特徴が簡潔に記されています。西日本の植物研究をおこなう際、このリストはたいへん貴重な情報を与えてくれるものでしたが、全リストをそろえるのは難しくもありました。それがこのような一冊の本となり、正誤表もつけられ、また1968年に書かれた「近畿地方の植物分布概説」も巻頭にあり、藤井伸二・黒崎史平・藤井俊夫3氏による「2004年版近畿地方の植物分布図文献目録まで載っているのですから、各号を大切に貯めてらした方には申し訳ないような重宝なものです。

注意しなければならないのは、この本が各植物の近畿内分布を網羅したものではないということです。村田先生も後述されているとおり、「近畿地方の京大にある標本目録といった方が、内容としてはふさわしい」でしょう。そのかわり「京都大学総合博物館でこの産地の標本をさがせば、むしろ容易に目的の標本に当ることが出来る」わけで、この本は植物地理学の結論ではなく、これからの研究を補助してくれるものです。中には分類学的再検討が必要と考える種についての注もあり、分類地理学的興味を持つ人にとって、知的好奇心の発端に

つながるものだと思います。

なお、この本がまとまることによって、村田先生の標本調査が終わったわけではないようです。すでに2005年近畿地方植物同好会々誌28号に「近畿地方植物誌補遺・訂正ノート1」が発表されています。このノートにはチョウジギクに関する面白い新知見が載せられています。この様子から言っても、京大標本室ではまだまだ先生の姿をお見かけできることでしょう。

*この本は、村田先生のご好意で、本学会会員の方は割引で購入することができます。料金および購入方法は以下の通りです。



会員特別価格：

3000円（税込）＋送料（1冊340円、2冊450円、3冊590円、10冊以上送料無料。4～9冊はお問い合わせ下さい。）

購入方法：下記の宛先まで、郵便振替で代金を振り込んで下さい。その際、通信欄に1)本のタイトル、2)購入冊数、3)合い言葉「分類学会ニュースレター17号を見た」を忘れずご記入下さい。また、振込人の欄には住所・氏名・電話番号をはっきりお書き下さい。

郵便振替：00980-1-317961 加入者名：大阪自然史センター

連絡先：大阪自然史センター（担当：森口さん、和田さん）電話：06-6697-6262

申込締め切り：2005年8月末日（在庫がなくなった場合はその時点で締め切ります。）

西田佐知子（名古屋大学）

いきもの便り

・コケのいろいろ・

坪田博美（広島大学）

コケと聞いて、皆さん何を思い浮かべるでしょうか？コケは、湿潤な日本では昔から和歌で歌われるなど、日本人にとって身近な植物です。しかし、教育の中でコケに関する内容が少なくなっていることもあり、正しく理解されているとはいえません。記憶だけでコケの絵を描いてもらえば、曖昧にしか認識されていないことがよく分かります。

フィールドに出てコケを採集していると、「何を見ているのですか？」と話しかけられます。「コケを調査しています。」と答えると、大抵の方は、「はあ、コケですか。がんばってください。」とだけ言って去ってしまいます。あるいはそれらしいものを指さして、「これもコケですか？」と聞かれる程度です。この場合、半分くらいの確率で地衣類であったり、小型のシダであったりします。地衣類であっても、つい説明をするのが面倒となり、「はいそうです。」と答えてしまいます。このとき、そのうちのひとりが地衣類を知っていて、「それは地衣類じゃないの？」と指摘してしまうと、こちらは立つ瀬がありません。

それではコケ植物とは何でしょう。実は簡単に説明するとなると意外に難しいも

のです。コケ植物とよく間違えられる地衣類の方は、「菌類と藻類が共生している共生体です。」と端的に説明ができます。しかしコケ植物は、「陸上植物のうち、胞子で広がり、核相 $2n$ の無性世代が核相 n の有性世代に依存した生活をする植物です。」と説明してもなかなか分かりづらいものです。本当に理解するためには、核相や世代交代についての知識が不可欠となるためです。また、コケ植物は、蘚苔類とも呼ばれますが、実際には蘚類（せんるい）と苔類（たいるい）、ツノゴケ類の3つの分類群を含めた植物の総称です。コケ植物が多少なりとも区別のできる植物の集まりであることも、説明を難しくしている理由のひとつかもしれません。

日本では野外でコケが多く見られますので、機会があればコケを観察してみてください。ルーペで見れば、コケ植物が非常に繊細な形をしていることに気が付くと思います。また、コケ植物の葉は基本的に1層の細胞層からなるため、切片を作らなくても細胞の観察が簡単にできます。とくに水辺に生育するチョウチンゴケの仲間は細胞が大きいので、観察も容易です。身近に存在するコケ植物が、本当の意味で多くの人にとって身近な存在になってもらいたいものです。



図. コケ植物の3群。それぞれ綱として取り扱われるが、独立した門とする場合もある。左から蘚類（スギゴケ類 *Polytrichum*）・苔類（ゼノゴケ類 *Marchantia*）・ツノゴケ類（*Anthoceros*）。写真は、広島大学デジタル自然史博物館 <http://www.digital-museum.hiroshima-u.ac.jp/~museum/> より。

中国植物記・1・

内貴章世（大阪市立自然史博物館）

中国に入って早や4日、道路の両脇に見る景色はまだてっぺんまで畑の山々が続いている。まさに「耕して天に至る」の世界だ。私は2002年4月中旬から約3週間、覃海寧博士（中国科学院植物科学研究所）らの広西壮族自治区西部から雲南省東南部にかけての調査隊に参加し、私が研究しているアリドオシ属 *Damnacanthus* の植物を調査する機会を得た。

翌日、広西西北部、貴州省に近い岑王老山の照葉樹林（標高1500～1800m）にようやくたどり着いた。暗い林床でアリドオシの一種 *Damnacanthus angustifolius* Hayata を早速見つけた。*D. angustifolius* は台湾だけに分布する種として発表された。しかし、標本調査してみると、中国の *D. labordei* (H. Lévl.) H. S. Lo, と *D. henryi* (H. Lévl.) H. S. Lo は *D. angustifolius* と同種であるという結論に達した。



Damnacanthus angustifolius (広西、岑王老山)

この2つは葉の幅の変異の端に位置するものであった。今回の調査でも一箇所では様々な葉の幅が見られた。倍数性はどの産地のものも2倍体 ($2n=22$)、DNA解析でも台湾のものと中国のもので全く同一の塩基配列であったので、*D. angustifolius* を台湾・中国に広範に分布する種として取り扱って問題なさそうである。

D. angustifolius のサンプリングを終え、ホッと見上げると、高さが10m近いヒイラギナンテン属 *Mahonia* の大木がいくつも見られた。魔除けかどうかは聞きそびれたが、ここでも祭礼に使うと言っていた。少し開けたところには、隔離分布で有名な

ズダヤクシュ *Tiarella polyphylla* D. Don が一面に広がっており、日本の照葉樹林とは一味も二味も違った雰囲気を感じさせていた。

今回は2日ほど道路を走って、ベトナム国境に近い靖西底定自然保護区（標高600m）に行くことになった。照



ズダヤクシュ (広西、岑王老山)

葉樹林にはつきものヤマビルに苛まれ、脱落者が何人も出る中、私は「我想上（「私は登りたいです」と言ったつもり）」と言ってガイドを1人つけてもらい、2人でどんどん登っていった。1000mあたりでヤマビルは姿を消し、さらに1300m付近まで登ったところで *D. angustifolius* を見つけることができた。ここでの採集記録はなかったのだが、森の雰囲気からしてあるはずだ、という根拠のない自信がたまたま功を奏した。

この調査はランの調査隊でもあったので、さらに龍邦というベトナム国境の街まで足を伸ばした。付近の石灰岩の小山をいくつか回ったが、ヨウラクラン属 *Oberonia* のように小さな花をつけるものから *Paphiopedilum* や *Vandopsis* といった園芸価値の高いも



左：*Paphiopedilum* の一種（広西、龍邦の石灰岩の山）。
右：*Vandopsis* の一種（広西、龍邦の道路脇の岩崖上）。

のまで何種ものランの群落をいともたやすく見つけることができ、道路脇の壁面にも多数張り付いていた。このときは雲南省に入ってあんなショッキングな光景に出くわすとは夢にも想っていなかった。（つづく）

※図のスケールは全て1cm

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館筑波実験植物園

日本植物分類学会 田中法生（会計幹事）

Phone: 029-853-8433

Fax: 029-853-8998

E-mail: ntanaka@kahaku.go.jp

会費： 一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、

団体会員 8,000 円

郵便振替 00120-9-41247

名 義 日本植物分類学会

平成 17（2005）年 5 月 18 日印刷

平成 17（2005）年 5 月 20 日発行

編集兼 福岡市東区箱崎 6-10-1

発行人 九州大学総合研究博物館

三島美佐子

発行所 福島市金谷川 1

福島大学共生システム理工学類内

日本植物分類学会